

## アルド・レオポルドの「土地倫理」と アメリカンネイチャーライティング

藤岡伸子

共通講座教室言語文化講座

(2000年9月1日受理)

### Aldo Leopold's "Land Ethic" and the Tradition of American Nature Writing

Nobuko FUJIOKA

Department of General Studies (Language and Culture)

(Received September 1, 2000)

#### synopsis:

Prominent biologist and forester, Aldo Leopold in his lifetime never considered himself a nature writer. Nevertheless, his last book, *A Sand County Almanac and Sketches Here and There* posthumously published in 1949, is often said to be the most widely read and most frequently cited work of modern American nature writing. Only few other works of American literature of any kind have had the both moral and practical impact of the book. It has, along with Thoreau's *Walden*, become an essential scripture of the environmental movement and the environmental education. It has also played a vital role in the development of a sub-field in philosophy, "environmental ethics."

It is in the essay "The Land Ethic", the final and concluding chapter of *Sand County*, the essence of Leopold's conservationist statement is crystallized. This article then is primarily an exploration of the essay with an aim to clarify what Leopold tried to evolve by the term, "land ethic." In Leopold's own succinct explanation, "the land ethic" is an extended form of our traditional ethic that "simply enlarges the boundaries of the community to include soils, waters, plants, and animals, or collectively: the land." In the formation of this epoch-making notion, Leopold seems to have owed much to the literary tradition of Thoreau and his literary descendants; Leopold's sensibility to regard nonhumans as "fellow creatures", a prerequisite to his supposition of an extended "land community", is definitely Thoreau's legacy. In this article, therefore, Leopold's place in the tradition of nature writing is also discussed in order to clarify the nature of his faith in a sustainable harmony among self, society, and nonhuman surroundings.

人間のみならず自然物もまた最適の生存への権利を持つ——環境倫理の重要な一角をなすこの考え方は、現代ネイチャーライティングの草分け的存在である Aldo Leopold (1887-1948)<sup>1</sup> が提唱した「土地倫理」"land ethic" という発想から生まれた。それは、権利や倫理の適用範囲を人間共同体の枠内に留め置くことに違和感を覚え、生き物はもとより水や土壌までもを包括する新たな拡大共同体としての「土地共同体」"land-

community" を現実のものとして感受しうる感性が生み出したものだった<sup>2</sup>。そしてその感性こそ、森の生き物を「同胞」"fellow creatures" と呼んだヘンリー・デイヴィッド・ソロー Henry David Thoreau (1817-62) 以来、アメリカのネイチャーライティングの中で一貫して研ぎ澄まされ成熟してきたものに他ならない。

概念としての「土地共同体」を語ることはたやすい。しかし我々現代人の意識は、通常あくまでも「人間共同

体」の埒内にあり、その境界を越える契機は、予期せぬ瞬間に予期せぬ形でしか訪れない。そうした越境の時、世界を自らの力で改変可能な幾何学的延長と見なす近代主義的な自己＝“ego”は崩壊し、我々は初めて真に「土地共同体」の一部となり果せる。

ヘンリー・ディヴィッド・ソローをはじめとするアメリカのネイチャーライターたちは、こうしたあやしい越境の時を求めて五感を研ぎ澄まし、その表象を模索してきた人々である。こうした日常の意識としての“ego”の輪郭が消え失せる不思議な世界の実際がどのようなものであるのかを探り、レオポルドの「土地倫理」の概念を生み出し、支えてきたアメリカの文学的背景の一端を明らかにしていきたい。

## 1. アメリカンネイチャーライティングの伝統とレオポルドの位置

ネイチャーライティングというものは、その本質においては文学の歴史そのものと同じだけ古く、また普遍的なものと言える。人間が自らの生きる世界・自然を探求し、その探求が自己の探求そのものであることを悟る時、そこに生まれる文学が本質的にネイチャーライティングと呼ばれるべき内容を含まないはずはないからである。だが今日「ネイチャーライティング」と呼ばれ、一つの隆盛を迎えている文学ジャンルは、本質的に時代や文化圏を越えた普遍性を持つこととは裏腹に、極めて新しく、またある意味で特殊なものである。それは、17世紀ヨーロッパにおける科学革命以来、西欧世界で築き上げられ保守されつづけてきた近代の根本想定そのものに大きな疑問が投げかけられ、ポスト・モダン社会の新たな枠組みが模索される中で、このジャンルが誕生したという経緯によるものである。<sup>3</sup>

近代という構築物に大小さまざまな亀裂が見え始め、近代社会の諸機構への異議申し立てが世界的に頻発した1950年代の終わりから70年代の始めにかけて、まさにその近代の理念を最も先鋭的に実践し続けてきたアメリカにおいて、ネイチャーライティングは新たなジャンルとして次第に意識されるようになった。華々しく展開された公民権運動やウーマンリブなどの異議申し立て運動の中で、現代社会への抵抗という底流を共有しつつも、それほど目立つことのない静かな一つの流れとして、しかし着実に、成熟を続けてきたのである<sup>4</sup>。その後、1980年代後半から90年代の初めにかけて地球環境の危機的状況が誰の目にも明らかなものとなるにつれ、この状況を覆すには近代科学がその発展の礎としてきた物質主義的世界観そのものを見直すことが不可欠なのだという認識が次第に広がりゆく中で、ネイチャーライティングへの関

心は初めて大きなうねりとなって現れた。このようなアメリカでの状況を受けて、1990年代前半に、ネイチャーライティングという新ジャンルは西欧世界全体に拡がりを見せ、日本でもアメリカ研究者を中心として急速にその概念が認知されるようになった。<sup>5</sup>

アメリカ文学において、ネイチャーライティングの伝統はその源流を17世紀植民地時代の作家たちにまでさかのぼることができる。しかし、上述のような現代的な意味での「ネイチャーライティング」は、文芸評論家ジョセフ・ウッド・クルーチ Joseph Wood Krutch (1893-1970) によって世に問われた初のネイチャーライティング撰集 *Great American Nature Writing*<sup>6</sup> によって確立された。その中でクルーチは、ソローを、近代社会における人間と自然のあり方について明確な問題意識を持ち、それを文学に昇華させた初めての作家であるとして、このジャンルの祖と位置付けた。<sup>7</sup> また、この撰集のエピグラムには、前年の1949年に出版されたばかりのレオポルドの *A Sand County Almanac and Sketches Here and There* 序文から次の一節が掲げられたのである。

Now we face the question whether a still higher “standard of living” is worth its cost in things natural, wild, and free. For us of the minority, the opportunity to see geese is more important than television, and the chance to find a pasque-flower is a right as inalienable as free speech.<sup>8</sup>

## 2. 「土地倫理」とその発想

ネイチャーライティング研究のマニフェストとも言えるクルーチの *Great American Nature Writing* の扉に掲げられたことが象徴するように、レオポルドの主張は、「ネイチャーライティングとは何か」、「その指向するものは何か」というこのジャンルの本質に関わる様々な問いへの答えが極めて明確に言語化されている。その例を確認しながら、土地倫理とその発想が具体的にいかなるものであるのかを概観しておきたいと思う。

レオポルドはまず、倫理的な規範にはその適用範囲の問題が最も重要であることに注意を喚起するため、オデュッセウスが、自分の所有する奴隷の少女たちを不品行のかどで12人まとめて一本のロープで縛り首にしたというエピソードを引き合いに出す。この出来事に誰も疑問を差し挟まないのは、彼女たちが個人の「所有物」“property”であり、生きた「財」“chattel”以上のものではないと認識されているからであるという。そして、今日においてもそうであるように個人の所有物の処遇はあくまでも「都合の問題であって、善悪の問題ではない」の

だとレオポルドは説明している。倫理の適用範囲から外れていることが、「神のごとき」英雄オデュッセウスをして、冷酷無情と我々には思われる処遇に走らせたのだと言うのである。同様に、土地をめぐる現代の我々の立場も、奴隷をめぐるオデュッセウスの立場と何ら変わりはないのだとして、我々が土地を単なる「所有物」として、あるいは生きた「財」として扱い続けてきたことの非を次のように訴えるのである。

There is as yet no ethic dealing with man's relation to land and to the animals and plants which grow upon it. Land, like Odysseus' slave-girls, is still property. The land-relation is still strictly economic, entailing privileges but not obligations.<sup>9</sup>

そして、人間の歴史の中で、倫理の適用範囲が徐々に拡大され、今やオデュッセウスの立場が疑いなく反社会的な過ちであると受け止められるようになったのと同じように、やがて「土地の収奪は単に得策でないばかりか倫理的に過ちでもある」<sup>10</sup>と社会が受け止めるようになるであろうと主張するのである。

そもそもあらゆる倫理則というものは、たった一つの前提の上に成り立ってきたとレオポルドは言う。その前提とは、「個々のものが相互に依存し合って成立している共同体において、その一構成員として認められていること」<sup>11</sup>にほかならない。「相互に依存し合って成立している共同体の構成員」の範囲は、今日の生態学的な知識を根拠とすれば、レオポルドの言うように、当然「土壌、水、植物、そして動物など、すなわち集合的に土地そのもの」<sup>12</sup>を包括するところまで押し広げられて行くはずである。レオポルドが「土地倫理」と呼ぶものは、この時、必然的にその構成員に対して生じてくるはずの倫理則なのである。

さらに、このような「土地倫理」の登場は、世界の中の人間の地位を根本的に変えることになる。デカルト以来世界の「征服者」たらんとしてきた人間は、「ただの一構成員・一市民」に過ぎない者となるのである。

In short, a land ethic changes the role of *Homo Sapiens* from conqueror of the land-community to plain member and citizen of it. It implies respect for his fellow-members, and also respect for the community as such.<sup>13</sup>

このように、「土地倫理」というものは、結局、世界の中での「私」とは何者であるのかという極めて根元的な

問いへと収斂していく。すなわち、その提起するものは、人間が他者として自然を保護することを説くものではなく、自己認識の問題そのものなのである。さらに、「土地倫理」という発想が人間の自己認識の問題そのものであるがゆえに、我々の世界観・世界像もまた抜本的な見直しを迫られることになる。<sup>14</sup>

### 3. 人間観・世界観変革へのアプローチ

だが、デカルト的二元を下敷きとした、精神の領域と物質の領域が分断された世界観から人間が脱却してゆくための現実的な道筋は果たしてどこに見出しうるのだろうか。問題は、その具体的な方途である。世界像の改変に向けて、個々の人間がなし得ることは何か—レオポルドの「土地倫理」の主張は、その道筋の明示までを含むものである。

その道筋とは、人間の身体性にあらためて着目すること、そしてその働きを最大限に発揮させることによって、精神の世界と物質の世界の損なわれたリンクを、人の理性と肉体のリンクを通じて奪回しようとするものである。精神と物質の分断とは、人間においては、頭と体、理性と感覚・感性の分断でもあった。肉体を離れた理性が人間の本質として尊重され、世界とのかかわりにおいて感覚・感情の介入が排除されることによって近代の物質主義的な世界像は構築されてきた。この世界像の生成の過程を覆すように、一人一人の人間が、感覚・感情を総動員して世界をなぞり直し、発見し直すことをレオポルドは提案するのである。

We can be ethical only in relation to something we can see, feel, understand, love, or otherwise have faith in.<sup>15</sup>

実のところ、レオポルドの用意したこのような答えは、すでに19世紀中葉に、「私は、一人一人の人間を社会の一員としてではなく、自然界の一個の住人 (inhabitant) として、すなわち自然の本質的な一部分と見なしたいと思う」<sup>16</sup>と宣言したソローが明快に示した変革への道筋と同じものである。ソローは次のように、「見、臭いを嗅ぎ、味わい、聞き、触れる」ことによる世界の再発見を次のように語っている。

I see, smell, taste, hear, feel, that everlasting Something to which we are allied, at once our maker, our abode, our destiny, our very Selves; the one historic truth, the most remarkable fact which can become the distinct and uninvited

subject of our thought, the actual glory of the universe; the only fact which a human being cannot avoid recognizing, or in some way forget or dispense with.<sup>17</sup>

さらに、身体性の復権という立場からレオポルドがさらに発展させて打ち出したもう一つの主張がある。それは、ある土地とそこに住む人間との本質的な絆の生成が世界観の変革への鍵であるというものである。

Perhaps the most serious obstacle impeding the evolution of a land ethic is the fact that our educational and economic systems is headed away from, rather than toward, an intense consciousness of land... He has no vital relation to it... In short, land is something he has "outgrown".<sup>18</sup>

西欧近代の価値体系においては、人間が環境に翻弄されない自律的な存在となること、場所や環境の特殊性から自由となることが、人間の尊厳確保への一つの道筋であると見做されてきた。ことに、アメリカにおいては、特定の土地に定着しないことがむしろ文化的活力の源と見做されてきた面を見過ごすことは出来ない。どこにいても実現されるべき「自己」の理想が普遍的に達成可能なものであると信じられたからこそ、常に新天地は求められてきたのである。だが、そうした理念の下で新天地を求めることは、新たな土地のありのままの姿と向き合うことでは決してなかった。どこに生きようと変わることのない自律的な近代人としての尊厳が追求され続けた結果、その果てに人が直面させられたのは、皮肉にも「生きている」実感そのものの喪失であった。

レオポルドは、こうしたアメリカ文化の進展の根幹をなしてきた、土地からの自立という近代主義的な夢自体に、重大な疑義を差し挟むのである。人間は、土地というものから「卒業した」「outgrown」と思い込んでいるがそれは錯覚なのだ、と。そして、個々の人間の存在を根幹で支えているそれぞれ固有の土地について、我々は「強烈な土地の意識」を取り戻さねばならないと言うのである。

このような、ある特定の場所に新たに住みつき、その場所にすでに幾星霜を経て作り上げられている自然のルールを学びながら、土地との根元的な絆を築くという発想は、現代アメリカで最も影響力の強い詩人の一人ゲーリー・スナイダーの「再定住」「reinhabitation」という概念へと受け継がれてゆくものでもある。<sup>19</sup> スナイダーは、この土地への定着ということに殊に強調したが、他のアメリカのネイチャーライターたちも、決して気まぐれな

自然探訪者ではないことに注目しておくべきであろう。

#### 4. 「土地共同体」の理想と現実—無為という戦略

これまでに概観してきた「土地倫理」の拡がりとその基盤となるべき「土地共同体」というもの想定、そしてその想定を現実のものとするための戦略。これらの一連のヴィジョンは、あまりに楽観的な夢にすぎないとする見方もある。しかし、ネイチャーライターたちは、決してそのヴィジョンが容易に到達可能なゴールであると高をくくってきたわけではない。<sup>20</sup> しかし同時にまた、現実の変革において自分たちが全く無力であると感じているわけでもない。彼らは、人と世界をめぐる新たな神話体系を構築してゆくという気の遠くなるような展望の下に、新たな物語を語り続けることに現実を変革して行く道筋を見出す人々である。例えばこのような展望を明確に語っているウィリアム・キトレッジによれば、ある社会の神話とは、その構成員に向けて真に価値あるものとは何かを指し示し、またそれを維持して行くためにはどのように振る舞えばよいのかを暗示するものであるという。<sup>21</sup> 遠回りな方法ではあるけれども、社会の新たな規範を再構築していくためには必要な回り道と見るのである。

アメリカにおいて、善悪の規範そのものの再構築を促すような力を持つ神話体系の、どれほどがすでに書かれてきたのかは判らない。しかし、すでにソロー以来およそ一世紀半の間に、新たなヒーローの一つの類型が作り上げられ着々と補強されつつあることは確かである。その様相を以下で概観しておきたい。

「自分の方から物に向かって行ってはならない。それが向こうからやってくるようにするのだ」「Go not to the object; let it come to you」とソローは言う<sup>22</sup>。性急な解釈を求めれば、世界の実相は全く見えてこない。それどころか、解釈を求めれば求めるほどそれは遠のいて行くという警告である。それゆえに、ただ待つことに心を砕けと言うのである。待つという一見したところの無為を、ソローは、ここで一つの積極的な戦略に転じようとしているのである。またこの同じメッセージは、さらに詳細に、そして具体的に、次のような言葉となって繰り返されていく。

One moment of life costs many hours, hours not of business but of preparation and invitation. Yet the man who does not betake himself at once and desperately to sawing is called a loafer, though he is constantly knocking at the doors of

heaven all the while, which shall surely be opened to him. That aim in life is highest which requires the highest and finest discipline. How much, what infinite, leisure it requires, as of a lifetime, to appreciate a single phenomenon! You must camp down beside it as for life, having reached your land of promise, and give yourself wholly to it. It must stand for the whole world to you, symbolical of all things.<sup>23</sup>

手っ取り早い知による理解に逃れるのでなく、たった一つの現象の本質を看破すべく、ただそこにどっしりと腰を据えて待つことは、この一節においてすでに一つの美学にまで高められていると言ってよい。無為はもはや単なる無為ではなく、人生においてくぐり抜けて行くべき「最も崇高で、最も洗練された試練」として我々に提示されるのである。ソローがこうした美学を説く背景には、世界の実相を探り語ろうとする試みにおいて、理知的解釈というものがどれほど当てにならないものであるのか、またそれにもかかわらず、どれほど悟性が人間の意識の世界で優位のものであるのかを常に意識し、その絶え間ない介入をソローが常に警戒していたことを忘れてはならない。「決して悟性に語らせてはならない。それは自然の響きではないのだ」とソローは断じるのである。<sup>24</sup>

ともあれ、このようなソローのメッセージに、現代アメリカのネイチャーライティングを代表する作家バリー・ロペス Barry Lopez (1945-) は、次のように見事に呼応している。

The land does not give easily. The desert is like a boulder; you expect to wait. You expect night to come. Morning. Winter to set in. But you expect sometime it will loosen into pieces to be examined.

When it doesn't, you weary. You are no longer afraid of its secrets, cowed by its silence. You break away, angry, a little chagrined. You will tell anyone the story: so much time spent for nothing. In the retelling you sense another way inside; you return immediately to the desert. The opening evaporates, like a vision through a picket railing.

You can't get at it this way. You must come with no intentions of discovery...<sup>25</sup>

全ての懐疑を超え、理解を放棄してただ虚心に待つというプロセスの果てに、ある時世界が突如様相を一変させ

る瞬間が訪れる。それは、世界の日常的秩序が崩壊する原初の時であると共に、自己="ego"の崩壊の時でもある。自己と世界の境界は消え失せ、ひととき、世界の一部たる「私」と「私」の一部たる世界を、時を同じくして体験するのである。

One morning as I stood watching the sun rise, washing out the blue black, watching the white crystalline stars fade, my bare legs quivering in the cool air, I noticed my hands had begun to crack and turn to dust.<sup>26</sup>

こうした日常の理性的な秩序崩壊の瞬間は、例えば次の例のように、ソローの作品中にも数多く見付けることができる。やはり、ロペスの例と同じように、無心の結果としてひととき訪れる、世界との合一の時であり、あやしくも至福に満ちた瞬間なのである。

This is a delicious evening, when the whole body is one sense, and imbibes delight through every pore. I go and come with a strange liberty with Nature, a part of herself. As I walk along the stony shore of the pond in my shirt-sleeves, though it is cool as well as cloudy and windy, and I see nothing special to attract me, all the elements are unusually congenial to me...<sup>27</sup>

あるいは、同様の例として、次のような一節も挙げる事が出来るだろう。

In the midst of a gentle rain..., I was suddenly sensible of such sweet and beneficent society in Nature, in the very pattering of the drops, and in every sound and sight around my house, an infinite and unaccountable friendliness all at once like an atmosphere sustaining me... Every little pine needle expanded and swelled with sympathy and befriended me. I was so distinctly made aware of the presence of something kindred to me, even in scenes which we are accustomed to call wild and dreary, and also that the nearest of blood to me and humanest was not a person or a villager, that I thought no place could ever be strange to me again.<sup>28</sup>

こうした至福の瞬間そのものは、ほどなくして消えて行くものではある。しかし、ひとときであれ、こうした別

世界の顕現に立ち会うことは、ある種の確信を人に与えるものであることは間違いない。ある種の確信とは、ソローのここでの言葉を借りれば、「いかなる場所ももはや二度と自分にとって見知らぬ場所ではありえないだろう」という確信、すなわち、自分自身をその一部として包括する世界というものを自分自身の現実として受容できるという確信である。そうした確信そのものも、所詮儂い夢のような確信であるのかも知れない。しかし、このように訪れては消えていく不思議な別世界を垣間見る経験を積み重ねて行くことによって、人間はしだいにその確信を確かなものにしてゆくことになる。

ソロー以来、アメリカのネイチャーライティングにおいて、さまざまなヴァリエーションを取りながら、繰り返し語られてきたこのような自己の放擲と不可思議な世界の顕現は、レオポルドの「土地倫理」という発想の誕生には、不可欠な伝統だったのではなかろうかと思う。「土地共同体」の一部として生き、また生かされる人間というヴィジョンは、レオポルドにとって決して空虚な理想論ではなかった。すでに身近な先達によって生かされ、また語られた文学的真實だったのである。

1935年、レオポルドは、ウィスコンシン州中央低地のいわゆる砂土地方 (Sand County) にすでに廃墟となっていた古い農場を見つけてそれを買い取った。そこに簡素な小屋を建て、以後、彼は大学での講義など公の仕事の合間をぬってそこで自然観察の日々を過ごすようになる。氷河の名残である砂の痩せ地に共に生きるものとして常に視点を低く保ち、共感と愛情に満ちた緻密な自然観察を終生続けることになった。そして、その体験は1949年に死後出版される *A Sand County Almanac and Sketches Here and There* に結実したのである<sup>29</sup>。ソローがウォールデン湖畔の小屋での独居生活を通じて確信した人間と自然との本源的な絆を、レオポルドはこの痩せた砂地での体験を通じて身をもって知ることになったようだ。この体験によって、語られた文学的真實であったものは、彼自身の現実となったのであろう。1933年の「自然保護の倫理」<sup>30</sup>において、レオポルドは人間中心主義の自然保護に限界を感じて新たな方向を模索しながらも、いまだ専門知識を駆使した大規模な自然管理という視点を完全に棄ててはいない。この時にはまだ、歯切れが悪いながらも、「制御された野生の文化」について語っているのである。彼が最終的に *Sand County* の最終章「The Land Ethic」で確信を持って示したような、生態系中心の立場への転向が明らかになるのは、この年、1935年以降のことである。<sup>31</sup>

## 5. さいごに

ネイチャーライティングは、ただ山河や動植物というような自然界を描く文学ではない。まして、ただの自然賛美でも自然との交歓を描くだけでもない。今日、我々をとりまく自然環境が深刻な危機に瀕しているのは事実である。しかし、その危機に瀕した自然を守るために自然の価値について世の注意を喚起するために書かれるプロバガンダ的な作品をネイチャーライティングだと考えるのは最も頻繁に起きている誤解である。

ネイチャーライターたちはたしかに多くの場合、自然のただ中に踏み入ってゆく。しかし、それは自然の美や驚異についての心安らぐレポートや感情を揺さぶるメッセージを都市の人間に持ち帰るためではない。彼らが自然の中に向かうのは、人間と自然との近代主義的な関係を自ら清算するためであり、その目的を達成するのに最も適した場として、社会機構や認識の枠組みからより自由である自然を選ぶからに過ぎない。とくにアメリカにおいて、現代のネイチャーライターたちが、穏やかで緑豊かな伝統的な美に彩られた自然には概ねひどく冷淡で、荒涼とした砂漠地帯や、陰湿な森、あるいは極北の地へと赴いて行くことは極めて示唆的であろう。彼らは、こうした伝統的な美意識や常識的理解が通用しにくい世界へ赴くことによって、人間が等しく陥りやすい理知という陥穽からより自由になり、自然を操作・コントロールする主体としての人間という幻想は徹底的に打ち砕かれることになる。そこに立ち現れる自然の原初の姿に立ち会い、新たな自己の出現に立ち会う時、新たに開かれた眼は、新たな美を発見し、美の標準をも創出する。

ネイチャーライターたちは、あらたな神話の創造者であると同時に、新たな美の創造者でもある。そして、新たな美の標準の提示は、たぶん神話の再構築という気の長い作業が目に見える成果を上げるよりも前に、我々を少しずつ変え始めているのだらう。人が何ものかに美を見出す時、人はすでにそれを何らかの形で自分自身に繋がる存在として認知しているのである。かつて人に何の感慨ももたらさず、むしろ忌み遠ざけられた渺茫たる砂漠—今日のアメリカでは、こうした砂漠が最も美しい自然景観の一つであることを、今や誰も疑わないのである。

## 注

<sup>1</sup> アメリカ合衆国森林局森林管理官・生物学者・環境倫理学者。鳥獣管理 (Game Management) という概念の生みの親。特定の狩猟鳥獣保護ではなく、生態系全体の保護を国有林で行うべきであるとし、原生自然区 wilderness area 制定の重要性を訴えた。この主張を

契機として、森林局は、1924年に初の原生自然区域として57万4千エーカーのヒーラGila原生自然区域を指定した。これを先駆けとする原生自然区域は、現在アメリカ全土で78カ所、総面積およそ1万4千エーカーにも及ぶ。1933年には、ウィスコンシン大学がレオポルドの功績を評価して鳥獣管理学講座を新設し、教授を迎えた。ウィルダネス・ソサエティの創設(1935)にも寄与した。

<sup>2</sup> Aldo Leopold, "The Land Ethic," *A Sand County Almanac: with Essays on Conservation from Round River* ([1966] New York: Ballantine, 1970, 1990), 239.

<sup>3</sup> ネイチャーライティングというものは、西洋近代主義そのものを問いに付すものがあるがゆえに、西欧近代世界の外側から多様な価値体系を取り込むことを本質的に必要としている。そうした多様な系から人間と世界との関係をめぐる言説の原点を探り出し、それを旋回軸とする新たな価値体系を創出しようとするからである。例えば、1997年にオックスフォード大学出版局から出版されたネイチャーライティング撰集 Richard Mabey, *The Oxford Book of Nature Writing* (Oxford, New York: Oxford Univ. Press, 1997) は、イソップやアリストテレスにまで遡ってその起源を説き起こし、西洋の精神史全体の中で近代を相対化しようとするものである。本稿で取り上げるような自然との直接的な関わりから新たな価値体系を創出しようとする試みと並行して、こうした過去の価値体系の再評価や先住民文化、あるいは東洋文化の摂取などもネイチャーライティングの重要な要素となっている。

<sup>4</sup> この時期の一連の異議申し立て運動の中で文学においては、公民権運動が「黒人文学」やその他のマイノリティ、特に「ユダヤ人文学」などの台頭を促し、女性解放運動が「フェミニズム文学」、「フェミニズム批評」を生んだ。こうして「人種」や「ジェンダー」という概念が、従来の文学のキャンノン(正典)の再考を強力に促し、その結果「アメリカ文学史」の眺めは一変した。

しかし、ネイチャーライティングというものは確実に成長を続けながら、この時期のキャンノン再編に食い込むまでには至らなかった。20世紀の末に至って、「アメリカ文学史」の中にネイチャーライティングの流れを含める新たなキャンノン再編作業はようやく緒に就いたところである。ちなみに、ゲーリー・スナイダー Gary Snyder (1930- ), エドワード・アビー Edward Abbey (1927-89), バリー・ロベス Barry Lopez (1945-), アニー・デイラード Annie Dillard (1945-) など今日のネイチャーライティングの隆盛を

支える主要な現代作家たちの代表作は、60年代から70年代にかけてのこの静かな成長期に書かれたものである。たとえば、Gary Snyder, *Turtle Island* (New York: New Directions, 1974); Edward Abbey, *Desert Solitaire: A Season in the Wilderness* (New York: Ballantine, 1968); Barry Lopez, *Of Wolves and Men* (New York: Scribners, 1978); Annie Dillard, *Pilgrim at Tinker Creek* (New York: Harper and Row, 1974) など。また、スナイダーとデイラードはそれぞれ上記の著作でピューリッツァー賞を受賞した。

<sup>5</sup> アメリカで1992年に設立された Association for the Study of Literature & Environment (ASLE) と連携し、各国文学の枠を越えるネイチャーライティング研究の場として日本文学・環境学会 (ASLE-J) が1994年に設立された。

<sup>6</sup> Joseph Wood Krutch, *Great American Nature Writing* (New York: William Sloane, 1950).

<sup>7</sup> その位置付けは今日なお有効なものであり、ソー文学のスコープを再検討することによって、「ネイチャーライティング」というジャンルの本質と広がり进行を明らかにする試みは近年再び盛んになっている。そうした試みの中で最も重要なものは、Laurence Buell, *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture* (London and Cambridge: Harvard Univ. Press, 1995) である。

<sup>8</sup> *Sand County*, xvii.

<sup>9</sup> *Ibid.*, 238.

<sup>10</sup> *Ibid.*, 239.

<sup>11</sup> *Ibid.*

<sup>12</sup> *Ibid.*

<sup>13</sup> *Ibid.*, 240.

<sup>14</sup> 今日の環境保護思想において「ディープ・エコロジー (deep ecology)」という概念がある。アルネ・ネス Arne Naess が "The Shallow and the Deep, Long-Range Ecology Movements" (*Inquiry* 16, 1973) で提唱したこの考え方は、いかに卓越した技術革新をもってしても、個々の問題点を個々の局面に応じてその都度繕っていくという方法、すなわちシャロー・エコロジー (shallow ecology) では現代の環境危機は回避できないとする考え方である。まず最初に必要なのは、抜本的な人間観・世界観そのものの変革であるということ。この発想は、まさにレオポルドの著作からの直接的な影響によって生み出された。

<sup>15</sup> *Sand County*, 251.

<sup>16</sup> Henry David Thoreau, "Walking," *Walden and*

- Other Writings of Henry David Thoreau*, ed. Brooks Atkinson ([1849] New York: Random House, 1965), 597.
- <sup>17</sup> Thoreau, *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, *Op. cit.*, 364.
- <sup>18</sup> *Sand County*, 261-2.
- <sup>19</sup> 同じ土地に幾世代も定住し続け、固有の文化を創出するような伝統社会のあり方を指す *inhabitation* から作られたスナイダーの造語。近代社会からの離脱と特定の土地への定住による新たな文化創造への意志を表明する概念、またその実現を目指す北カリフォルニアを中心に展開されている運動。山里勝巳「ゲーリー・スナイダーと再定住」、『アメリカ文学の〈自然〉を読む』（ミネルヴァ書房、1996年）に詳しい。
- <sup>20</sup> 例えば、エドワード・アビーの次のようなシニカルな一節は、彼らの現実認識がどのようなものかを暗示している。All men are brothers, we like to say, half-wishing sometimes in secret it were not true. But perhaps it is true. And is the revolutionary line from protozoan to Spinoza any less certain? That also may be true. We are obliged, therefore, to spread the news, painful and bitter though it may be for some to hear, that all living things on earth are kindred. (Edward Abbey, *Desert Solitaire: A Season in the Wilderness* ([1968] New York: Ballantine, 1971, 1990), 24.
- <sup>21</sup> William Kittredge, "Owing it All", *Owing it All* (Minneapolis: Graywolf Press, 1987), 62-4.
- <sup>22</sup> *The Journal of Henry David Thoreau*, ed. Bradford Torrey and Francis H. Allen, (New York: Dover, 1962), I, 351.
- <sup>23</sup> *Ibid.*, 508-9.
- <sup>24</sup> *Ibid.*, 101.
- <sup>25</sup> Barry Lopez, *Desert Notes, Desert Notes/River Notes* ([1976] New York: Avon, 1990), 7.
- <sup>26</sup> *Ibid.*, 9.
- <sup>27</sup> Thoreau, *Walden*, *Op. cit.*, 117.
- <sup>28</sup> *Ibid.*, 119-20.
- <sup>29</sup> *A Sand County Almanac and Sketches Here and There* (New York: Oxford Univ. Press, 1949).
- <sup>30</sup> "The Conservation Ethic", *Journal of Forestry* (1933). 後に大幅な修正を経て、*A Sand County Almanac* の最終章 "The Land Ethic" となった。
- <sup>31</sup> Donald Worster, *Nature's Economy* (Cambridge, New York: Cambridge Univ. Press), 285.